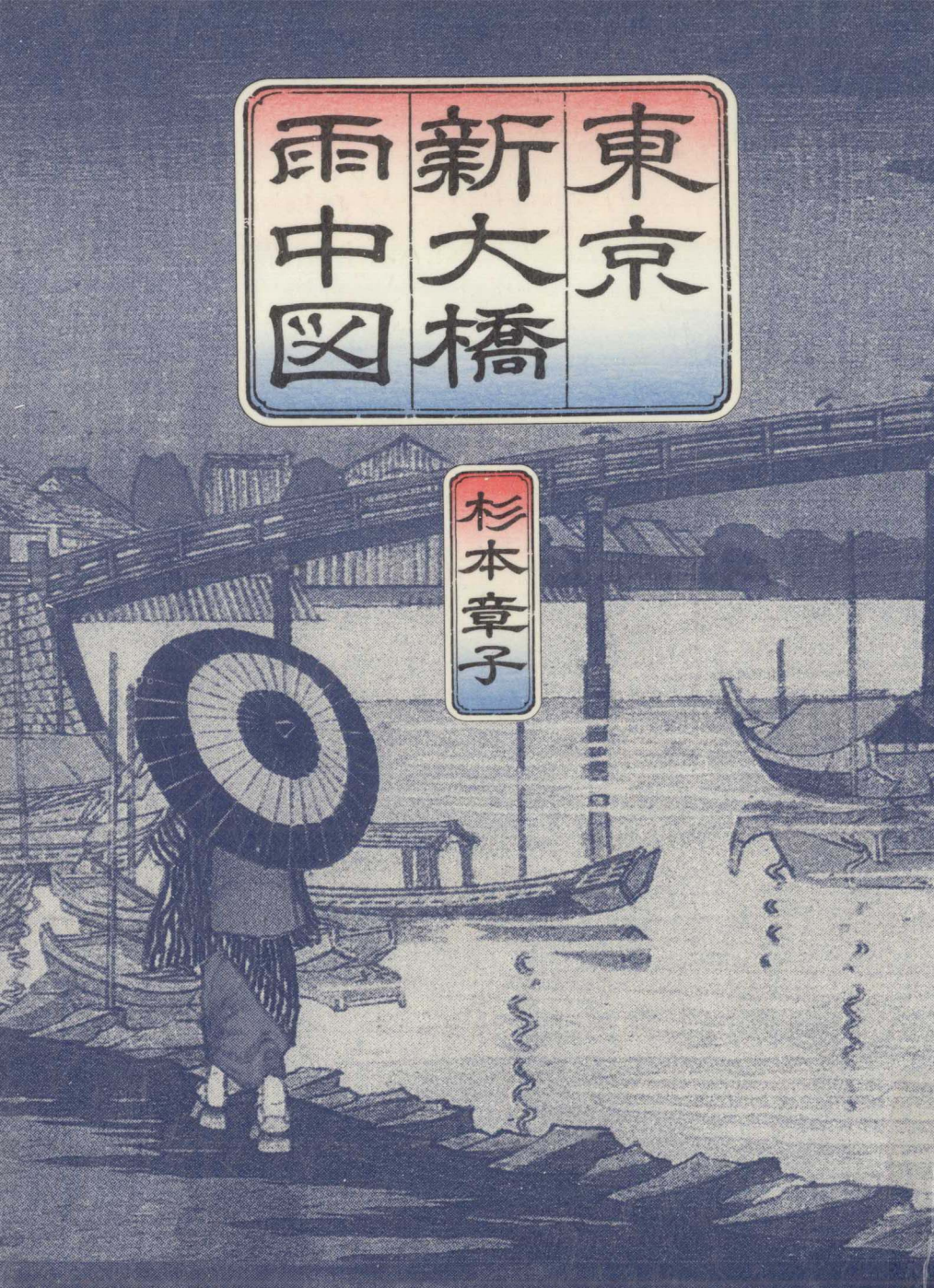
東京新大橋雨中図

杉本章子



東京新大橋雨中図

杉本章子

新人物往来社

〈著者略歴〉

杉本章子（すぎもと・あきこ）

昭和28年5月28日福岡生まれ。ノートルダム清心女子大学国文科卒業，金城学院大学大学院修士課程修了。昭和54年，「男の軌跡」で第4回歴史文学賞佳作入賞。昭和58年，『写楽まぼろし』で第89回直木賞候補，昭和60年，「名主の裔」で第93回直木賞候補。

東京新大橋雨中図

一九八八年一一月二五日　第一刷発行
一九八九年　二月　十日　第三刷発行

著　者　杉本章子
発行者　菅　英志
発行所　新人物往来社
東京都千代田区丸の内三―三―一（新東京ビルヂング）〒一〇〇
電話東京（二二二）三九三一（代表）振替東京六―一五一六四三

印刷所　図書印刷
製本所　小泉製本

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

©杉本章子　（定価はカバー・帯に表示してあります）　Printed in Japan

ISBN 4-404-01583-6 C0093

目次

新橋ステンション夕景……五
東京新大橋雨中図……七三
根津神社秋色……一四一
浅草寺年乃市……二四

装　　幀・森田誠吾
レタリング・徳留正昭

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

東京新大橋雨中図

新橋ステンション夕景

一

清親がはっとしたときにはもう、左わきにいた保太郎は一歩踏み出して、鋭い声を放っていた。

「足のものを、お脱ぎください」

止める間など、なかった。清親はあっけにとられて、保太郎の痩せた後ろ姿を見つめていた。五月二十五日の朝五ツ半（午前九時）――示達の刻限どおりにやってきた二十名あまりの官兵を迎える本所御蔵屋敷の玄関先は、一瞬静まり返った。

「なんと吐かした」

草鞋がけのまま、ゆうゆうと式台に上がった御蔵受取役が、玄関先の石畳に控える清親たち七人の引渡し役を、じろりと振り向いた。三十なかばの小太りの男で、怒りに眉を逆立てている。

「足のものをお脱ぎください、と申しました。てまえども、本日のお引渡しに臨み、十全を期すべく、昨日来、夜を徹して屋下のことごとくを清めております。なにとぞ、足のものを」

保太郎はうわずった声をあげた。
「堀、控えぬか。退れ、退れ」
受取役を式台に出迎えていた御蔵奉行が、顔色をうしなって叱責した。
「堀さん、堀さん」
清親も蒼ざめて、後ろから袖を引いたが、保太郎は受取役を見すえて動かない。
保太郎は本所御蔵屋敷の御勘定掛で、清親と同役である。役宅が隣り合って長じたので、保太郎の人となりは知り尽くしていた。きわめて温和な性格で、まかりまちがってもこのような振る舞いに出る男ではないのだ。明ければ三十という分別のある齢で、つい先ごろ、ふたりめの子を持ったばかりである。
——もしや……。
堀さんは官兵を目にしたとたん、消息を絶った圭次郎に思いを馳せて、つい、かっとなったのではあるまいか、と清親は思った。
圭次郎は、保太郎の七つ齢下の弟である。兄とちがい、利かん気で血の気の多い圭次郎は、江戸城明渡しの日、両親や兄夫婦の制止もきかずに、薩賊討滅を叫ぶ彰義隊に走った。そして十日前の上野のいくさで討ち死にしたものやら、どこぞへ落ちのびたものやら、杳として消息が知れずにいるのだ。
清親と圭次郎は同年で、しじゅう連れ立って遊んだ仲である。同じ寺小屋で学び、十四の正月からは、これまたともに講武所へも通った。できることなら清親も、彰義隊に加わりたかった。しかし清親は、若輩ながらも小林家の当主である。家と、六十の坂を越した母をおいて、彰義隊に身を投ずるわけにはいかなかった。

「この木っ端役人。官軍に無礼は許さんぞ」
「賊徒め、なんをほざくか。叩っ切れ」
官兵のなかから、殺気にみちた声が飛んできた。官兵は、回向院とその付近の町家に分宿している福岡藩兵である。
「もういっぺん吐かしてみろ」
受取役が式台をおりて、保太郎に近づいてきた。
「なにとぞ、足のものを……」
そこまで口にしたとき、保太郎は横っ面に受取役の鉄拳をくらって、石畳の上に倒れた。
「ばかもん。もうこの御蔵屋敷は官のもんじゃ。脱ごうが脱ぐまいが、当方の勝手次第と心得ろ」
受取役は、起き上がれずにいる保太郎を見下ろして言い放った。
「江戸は合切、官のものになったんじゃ。官兵の所業が気に食わんのなら、早う退って、こんたび下し置かれた駿河へでも落ちて行け」
徳川宗家十六代を襲った家達の駿河府中への移封が、昨日下達されたのである。受取役はつばきを吐き棄てて踵を返すと、またずかずかと式台に上がり、おろおろしている御蔵奉行をうながして、奥へ消えた。
「堀さん」
清親は保太郎に駆け寄った。受取役の振る舞いに、腸の煮えくり返るような忿りをおぼえている。
「大事ありませんか」
身の丈六尺二寸もある大男の清親は、保太郎の腋下に腕を入れると、軽々と抱き起こした。鉄拳で

いためたらしく、保太郎は鼻血を出している。立ち上がった保太郎は、ふらつきながら懐紙を取り出して鼻血を拭いた。

本所御蔵は十二棟百五十戸前あって、常時十五万石前後が詰米されている。その出入りを記した蔵米出入簿、御蔵の鍵、金箱、それに什器備品台帳などを査収したあと、御蔵をまわり、一行が引き揚げて行ったのはかれこれ四ツ半（午前十一時）だった。

そのあと、保太郎は奉行に呼びつけられた。ほかの引渡し役連中は、勤め部屋の後片づけを年若の清親に押しつけて、早々に帰ってしまった。役宅も接収されるため、明日じゅうに深川の下総関宿藩下屋敷の長屋へ移るよう、数日前に奉行から達しが出ているのだ。みんな、これまで御蔵引渡しの準備に大わらわだったせいで、引っ越し支度はこれからだとこぼしながら帰って行ったが、それは清親にしても同じである。夏羽織を脱ぐと、清親はしょうことなく後片づけにかかった。

官兵が目もくれなかった雑多な帳簿のたぐいを、お引渡しの行われた広間から勤め部屋へ運んできて、もとの倹飩箱に納め、懸硯や算盤などを戸棚にしまい、同僚の持ち机を部屋の隅に積み上げたら、汗だくになってしまった。五月といっても先月に閏があって、気候は六月なのだ。まだ梅雨も明けず、蒸し暑い日が続いている。清親はうんざりしながら部屋を掃きはじめた。だがそのうちに、もう二度とここへくることはないのだという感慨が胸にあふれ、手を止めてつくづくと部屋を眺め渡した。

清親は弘化四年（一八四七）八月一日、本所御蔵屋敷の小揚方総頭取、小林茂兵衛の子として生まれた。小揚方総頭取というと聞こえはいいが、なんのことはない、小揚人夫三百名の総監督にすぎないのである。食禄もわずか五両二人扶持、御蔵役人のなかでも端役で、父親は毎晩、竹刀削りの内職をして暮らしを立てていた。内職は、父親がひとつ格上の御勘定掛になってからも続いた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

清親が十六のとき、父が死んだ。清親は九人兄弟の末子であったが、上が早世したり、酒色に身を持ち崩したりして家を出ていたため、家督を継いだのである。

亡き父親が坐り、自分も十六の齢から坐った勤め部屋の畳に、清親はごろりと横になった。父がそうであったように、役宅とこの部屋とを行き来して、お役目大事に勤め上げ、平穏な生涯を終わるはずだったのである。それが十九の齢、十四代様の長州再征の上洛に御勘定下役として従ってからというもの、狂ってしまったのだ。あしかけ四年も大坂に滞陣させられたあげく、にわかに鉄砲組として駆り出された鳥羽伏見のいくさで惨敗を喫し、命からがら江戸へ逃げ帰ってみると、御蔵屋敷はもうその役目を止めていた。そして今日の引渡しである。清親はしみの出た天井板をしばらく眺めていたが、やがて身を起こすと、隅々まで掃き清めて部屋を出た。

通用口までくると、奥から保太郎が姿を見せた。

「なんだ、まだ残っていたのか」

保太郎は清親に気づくと、声をかけた。

「はい。後片づけがありまして」

「さては、みんなに押しつけられたな」

ふたりは肩を並べて通用口を出た。

「いやもう、さんざんに絞られた。大事のまえの小事と思い、奉行のわしが目をつむっているのに、身分もわきまえず、至らぬ口を利くとは不埒千万。おまえの失態で、御蔵引渡しがぶち壊しにでもなったならなんとした。切腹ものだぞ、とな」

保太郎が首筋をなでながら苦笑した。

「しかし土足で押し通るとは言語道断ですよ。屋敷じゅうくまなく清めて、お引渡しに使う広間などは畳替えまでして待ち受けていたというのに……。しかもこれが薩長のやつらならばいざしらず、つい先ごろまでは外様ながらも、譜代衆同様に大公儀にかしずいてきた福岡藩の者ではありませんか。少しはこちらの心中を察してくれてよさそうなものを……」

清親は受取役の傲慢な顔つきを思い出して、吐き捨てるように言った。

「それはそうだが、あの藩はあの藩でいろいろと面白くない事情があるらしい。これはお奉行の話なんだが、天下の形勢を見て大慌てで藩是を変えて、東征軍に従ったはいいが、薩長のやつらにてんから相手にされていないというんだ。そしてあのようなにわか官軍の手合いは、いつも弾よけがわりに陣頭に立たされているそうな」

「……」

「それでいて、戦功はすべて軍監を務める薩長のものとなる。うっぷんもたまろう。今日の土足の一件も、そういったうっぷん晴らしだったのかもしれん。おれもな、官兵を迎えたとたん、やつらが圭次郎の仇敵に思えてきて、うっぷん晴らしをせずにはおれなかった」

「……」

やはりそうだったのか、と清親は思った。

「さ、急いで戻ろう。今度は役宅の引渡し役をやらねばならんからな」

保太郎は気を変えるように戯れを言うと、清親をせかして門のほうへ足を早めた。

門を出たところで、清親はひっそりとした御蔵を振り返った。春、夏、冬の切米支給の日——御蔵前は札差しや仲買人、それに馬持ちや大八などでごった返したものである。清親はそのころの埃くさ

い賑わしさをしのびながら、先を行く保太郎のあとを追った。
翌日、清親母子と堀一家は、大川越しに首尾の松の見える横網河岸の役宅から、南へ半里ほど下った高橋すじの霊巌寺西向かいにある関宿藩下屋敷の長屋へ、そろって引き移った。だが長屋は先方ですでに割り振られていて、これまでのように隣り合って住まうわけにはいかなかった。

九月八日、慶応が明治と改まった。それから十日あまり経った夕方のことである。保太郎が、裏門に近い清親母子の長屋へやってきた。清親が自室にあてている入口そばの小部屋へ通すと、保太郎は声を曇らせて言った。
「明日、圭次郎の弔いをする。ついては、おぬし、線香を供えてやってはくれぬか」
「そんな、生死が明らかでもないのに」
清親は保太郎を見つめてなじった。
「いくさが止んでもう四月だぞ。彰義隊狩りもおさまったというのに、いまもって消息がない」
「……」
「おれもあきらめきれずに上野かいわいはおろか、市中の心あたりは一軒残らず尋ねてまわったが、皆目、行方が知れないのだ。もう、あきらめるしかなかろう」
「……」
「弔いをして踏ん切りをつけないことには、家の者の心が安まらんのだ」
「……わかりました。お参りします」
清親は迷ったすえにうなずいた。

「かたじけない。おぬしが線香をあげてくれたら、圭次郎も泉下で喜ぶことだろう。ところで、この長屋も十月きりで立ち退かねばならんが、おぬし、身の振りかたをどうするのだ」

保太郎は話を変えた。

譜代衆であり、下屋敷が本所御蔵に近いことから、役宅を接収された御蔵役人を暫時預かるよう徳川家に頼まれた関宿藩は、一日も早く預かり人を厄介払いしたがっていた。頼み主の徳川家を嗣いだ家達は、八月九日に江戸を発って、すでに駿府に移っているのである。

それと前後して、旧幕臣たちの離散がはじまっていた。家達のあとを追って駿府へ下る者、新政府に抗い奥羽北越の地をめざす者、暇乞いをして農工商などに帰する者、新たに官途につく者——道は、この四つしかない。

「はい。駿府に下ろうと思っています」

清親は声をひそめて言った。

七月十七日、江戸が東京と改められてこっち、ずっとそのことを考えていた。やがて新政府のやつらは江戸の町をも毀ってゆき、東京という新奇な名の似合う町に仕立て直すにちがいない。日に日に姿を変えていくであろう江戸の町で、暮らしていきたくはなかった。

「ただ、母が承知してくれるかどうか。あの齢ですから、言い出しかねています」

「そうか、駿府へな。それもよかろう」

保太郎は大きくうなずいた。

「母御のことは、まあ、なんだが……。独り身のおぬしは身軽でよい。おれなどは係累が多くて、いきおい大事をとらねばならん」

「堀さんはどうなさるのですか」
「うむ。団子屋をやることにした。暇乞いをして、なにか小商(こあきな)いでもと考えていたやさきに、ついそこの霊巌寺表門前町(れいがんじおもてもんぜんまち)で、団子屋の売りものがあったのを目にしてな」
「……」
「ほんの小店だが、値が手ごろだし、家内も団子屋ならばなんとかやれそうだというので、腹を決めて手付けを打った」
「団子屋、ですか」
御家人だった身が、団子屋のおやじとは……清親は公儀瓦解のなんたるかを、まざまざと見せつけられる思いがした。
「ああ。取るに足らん軽輩が、扶持に離れたのだ。恒産があるわけではなし、なんでもやるさ。一家を養わねばならんからな。みごと団子屋のおやじに納まってみせるさ」
保太郎はさっぱりとした口調で答えた。それから小半刻(三十分)ばかり、保太郎は聞き知った同役たちの身の振りかたなどを話して戻って行った。
その夜、つましい夕食のあとで、清親は駿府移住の話を切り出してみた。母は、ときどきうなずきを入れて耳を傾けている。
「小林家の当主はおまえなのですから、おまえの意に従います」
清親が話を結ぶと、母はきっぱりと言った。
「わたしはこれでも、足腰は達者だから、道中おまえの足手まといにはなりませんよ。安心をおし」
兄たちの不身持ちなどで心を痛め続けた母は、五十を前にしたころから、なかば白髪をいただいて

いた。この母に、これからまたしても心労苦労を積ませるのかと思うと、清親は胸が痛んだ。

圭次郎の弔いをすますと、堀一家は長屋を引き払い、霊巌寺表門前町の団子屋に移って行った。

月が替わった十月朔日の昼どき、清親は三人の兄と嫁いでいるふたりの姉たち一家を長屋に招いて、ささやかな別離の宴を張った。五日に、駿府へ旅立つことにしたのである。その宴に、佐江だけが姿を見せなかった。佐江は、三番めの兄虎造の妻である。

「佐江はあいにくと躰をこわして、臥せっておりますので……」

遅れてきた虎造が、上がり口で母にそう言いわけをしているのを、清親は長兄の茂平に酌をしながら耳にはさんだ。虎造は村松町の長屋に住んで、得意先まわりの貸本屋をしている。兄弟は日ごろの無沙汰を詫び合うと、夕方まで歓をつくした。

兄弟たちが別れを惜しみながら帰って行くと、母は後片づけにもかからず、がらんとした部屋のなかに坐っていた。その淋しそうな姿に、声をかけるのもはばかられて、清親は自分の部屋に入り、小葛籠を抱えてくると、黙って外へ出た。

外は、風が冷たかった。風にのって、米搗き場のあたりから目を刺すような白い煙が流れてきた。焚き火をしているのだ。清親は焚き火のそばへ行き、落ち葉や古俵を焚いている中間に、燃したいものがあるので代わってくれと頼んだ。中間はあっさりと承知し、後始末にはたっぷりと水をかけておくんなさいと言って、立ち去った。

清親は小葛籠をあけた。なかに、これまで描きためた画帳がぎっしりと詰まっている。清親は一冊一冊取り出しては、ぱらぱらとめくって火にくべた。画帳はふちから狐色になってめくれあがり、よじれ、みるみる燃えていった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com